

■ちーびし

○執筆者紹介

- ①生年・出身地、②所属、③専門領域、④研究業績、
⑤奄美と関係した活動
の順番で掲載しております。

■地頭蘭 隆（じとうその たかし）

- ①1958年・鹿児島
②鹿児島大学農学部生物環境学科地域資源環境学講座助教授
③水文学、砂防学、水文地形学
④ 1) 地頭蘭隆・下川悦郎・迫正敏・寺本行芳：鹿児島県出水市針原川流域の水文地形的特性と深層崩壊，砂防学会誌 56(5)，pp.15～26，2004
2) 地頭蘭隆・下川悦郎・寺本行芳：シラス地域の水文地形とシラス斜面崖錐部の崩壊，地形 23(4)，pp.611～626，2002
3) 地頭蘭隆・下川悦郎：鹿児島県北西部地震，地震砂防，古今書院，pp.88～98，2000
⑤ 1) 鹿児島県の集落水源山地整備事業調査（大島郡笠利町，西之表市，十島村中之島）に参加。
2) 1990年台風19号による奄美大島瀬戸内町土砂災害調査に参加。
3) 1995～1999年環境庁「屋久島における島嶼生態系の保全に関する調査」に参加。

■帛尾 達哉（とらお たつや）

- ①1955年・青森県
②鹿児島大学法文学部人文学科日本・アジア総合文化講座教授
③日本古代史
④『日本古代の参議制』（吉川弘文館1998年）

「鹿児島県京田遺跡出土の「田刀口」について－田堵初見史料の出現－」（『鹿大史学』49 2002年）
「刀祢源流考」（『史林』86－2 2003年）

■萩野 誠（はぎの まこと）

- ①1959年・福岡県
②鹿児島大学法文学部経済情報学科経営情報講座教授
③経営情報論
④『情報技術と差別化経済』九州大学出版会、2003年
『鹿児島の経営者にみる成功の法則』南日本出版社、2003年

○奄美ニューズレター執筆要領

奄美ニューズレターの執筆者は、以下の要領を遵守してください。

1. 原稿の分量

- (ア)調査研究レビュー 6 ページ
 - (イ)しまゆむた 2 ページまたは4 ページ
 - (ウ)島嶼スケッチ 2 ページまたは4 ページ
 - (エ)鹿大資料紹介 2 ページまたは4 ページ
- ・ 1 ページは、20文字×40行×2 段＝1600字となっております。

2. 原稿の書式

- (ア)基本的には、サンプルをもとにしてWordで執筆願います。
- (イ)写真・表なども、Wordにくみこまれるようにお願いします。
- (ウ)タイトルは、1 段組で3 行程度におさまるようにしてください。
- (エ)タイトルおよび氏名については英文のものを原稿の最後につけておいてください。裏表紙に記載されます。

3. 執筆者プロフィールについて

- (ア)執筆者は、プロフィールを巻末に載せますので、以下の項目について編集責任者萩野へメールにて送付願います。hg@leh.kagoshima-u.ac.jp

- ① 氏名（よみ）
- ② 生年・出身
- ③ 現職
- ④ 専門領域
- ⑤ 主な業績3 本まで
- ⑥ その他（島嶼研究に関わることなら）

(イ)例)

- ① 萩野 誠（はぎの まこと）
- ② 1959年・福岡県
- ③ 鹿児島大学法文学部経済情報学科経営情報講座教授
- ④ 経営情報論，ベンチャー企業論
- ⑤ 『情報技術と差別化経済』九大出版会，2003年
『鹿児島の経営者にみる成功の方程式』南日本出版，2003年。
「都市と農山漁村との交流圏の形成について」 Discussion Papaers in Economics and Socioloty, No.301,2003年
- ⑥ 鹿児島大学人文社会科学部研究科名瀬市サテライト教室実施委員会委員長

4. 原稿の提出について

(ア)ニューズレターは、毎月20日発行となります。

(イ)原稿については、各月号の前月末までを提出期限としております。

・例えば、2月号に執筆の場合1月末までの執筆となります。

(ウ)校正は、1回だけとさせていただきます。校正の最終期限は15日となります。

5. その他

(ア)執筆者には、ご希望ならばニューズレターを10部送付いたします。

(イ)抜き刷りは、発行いたしません。

○編集後記

- 本誌も第6号をむかえた。今回も力作がそろった。古代日本史の専門家である帛尾氏のシマという言葉の解明は楽しめる。農業生産力（財政支出の自弁可能性）との関係で「国」と「嶋」との区別が説かれている。

萩野氏のものは、自然を公共財と捉え、これを金銭換金する仕組みを創出することによって島嶼地域の所得向上をはかろうとする。本プロジェクトの核ともなる氏の研究が奄美からどうみえるだろうか。地元からの反応を期待したい。

地頭蘭氏の屋久島の水文研究には法律家として特に興味を持った。土面川というところ、昭和54年9月30日、永田地区土面川沿いの民家が土石流の直撃を受け、民家12棟が流失又は全壊、3棟が半壊、133棟が床上浸水、果樹園、スギ林の流失等の被害をうけた災害がなお記憶に新しい。被害住民によって国家賠償訴訟が起こされ、林野庁の伐採によって起きた人災か、不可抗力の洪水かが争われた。裁判所は、「台風によってもたらされた豪雨と崩壊地の地形、地質を要因として深層から発生した崩壊であって、森林の崩壊抑止機能が及ばない」などと判断して住民の請求を退けた。行政の責任論はともかく、氏の研究は防災のための基礎的な研究として貴重なものに思える。(U)

- 今回の表紙の写真は、ダイビングショップR I K Iからお借りしました。ありがとうございます。(http://www4.ocn.ne.jp/~riki.net/)

研究責任者 山田 誠
奄美ニューズレター
発行 鹿児島大学

編集責任者 萩野 誠
AMAMI News Letter
印刷 南日本共同印刷株式会社